修行者百鬼夜行にあふ事　（宇治拾遺物語巻一第十七）

今は昔、修行者のありけるが、津（摂津）の国まで行きたりけるに日暮れて、竜泉寺とて大きなる寺の古りたるが人もなき（連体形）ありけり。これは人宿らぬ所といへども、そのあたりにまた宿るべき所なかりければ、いかがせんと思ひて、笈（おい）打ちおろして内に入りてけり。

不動の呪（じゆ）を唱へてゐたるに、「夜中ばかりにやなりぬらん」と思ふ程に、人々の声あまたして来る音すなり。見れば、手ごとに火をともして、百人ばかりこの堂の内に来集ひたり。近くて見れば、目一つつきたりなどさまざまなり。人にもあらず、あさましき者どもなりけり。あるいは角生ひたり。頭もえもいはず恐ろしげなる者どもなり。恐ろしと思へども、すべきやうなくてゐたりければ、おのおのみなゐぬ。一人ぞまた所もなくてえゐずして、火をうち振りて我をつらつらと見ていふやう、「我がゐるべき座に新しき不動尊[1]こそゐ給ひたれ。今夜ばかりは外におはせ」とて、片手して我を引きさげて堂の縁の下に据ゑつ。さる程に、「暁になりぬ」とて、この人々ののしりて帰りぬ。

「まことにあさましく恐ろしかりける所かな、とく夜の明けよかし。往なん」と思ふに、からうじて夜明けたり。うち見まはしたれば、ありし寺もなし。はるばるとある野の来し方も見えず。人の踏み分けたる道も見えず。行くべき方もなければ、あさましと思ひてゐたる程に、まれまれ馬に乗りたる人どもの、人あまた具して出来たり。いとうれしくて、「ここはいづくとか申し候ふ」と問へば、「などかくは問ひ給ふぞ。肥前国ぞかし」といへば、「あさましきわざかな」と思ひて、事のさま詳しくいへば、この馬なる人も「いと希有の事かな」肥前国にとりてもこれは奥の郡なり。これは御館へ参るなり。といへば、修行者悦びて、「道も知り候はぬに、さらば道までも参らん」といひて行きければ、これより京へ行くべき道など教へければ、舟尋ねて京へ上りにけり。さて人どもに、「かかるあさましき事こそありしか。津国の竜泉寺といふ寺に宿りたりしを、鬼どもの来て『所狭し』とて、『新しき不動尊、しばし雨だりにおはしませ』といひて、かき抱きて雨だりについ据ゆと思ひしに、肥前国の奥の郡にこそゐたりしか。かかるあさましき事にこそあひたりしか」とぞ、京に来て語りけるとぞ。

---

[1] 1、この「ひとり」には修行者がどのように見え、どのように扱ったか。